

(別紙様式3)

令和2年(2020年)3月30日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号
管理機関名 熊本県教育委員会
代表者名 古閑 陽一 印

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和元年 6月 6日(契約締結日)～ 令和2年 3月31日

2 指定校名・類型

学校名 熊本県立天草拓心高等学校
学校長名 酒井 一匡
類型 プロフェッショナル型

3 研究開発名

産業イノベーション人財の育成
天草の魅力ある農業で持続可能な未来を拓くリーダー

4 研究開発概要

地域が直面する社会問題に対し、解決策を提案し、実行できる産業イノベーション人財の育成を目指し、平成31年度(2019年度)入学生(1年生)を対象に以下の取組を行った。なお、平成31年度(2019年度)2～3年生についても予定される内容を一部先行して実施し、研究の深化を図った。

(1) 「課題研究型学習(天拓プロジェクト)」(地域課題を題材にした学習)

「農業と環境」及び「総合実習」などの授業や長期休業期間、週末を利用して、平成31年度(2019年度)は第1学年全員で地域課題に関するをテーマについて取組を実施した。

| | |
|----------|-------------------------------|
| 第1年次(基礎) | 地域理解及び課題を発見し、解決の手法を学習・SBP*の導入 |
| 第2年次(定着) | 地域資源を活用する力の育成・課題解決型学習の実践 |
| 第3年次(応用) | 経営力育成プログラムの構築・学びを社会で実践 |

※ SBP(Social Business Project)の略称であり、天草市と協働によるプロジェクトを実践する組織を形成

(2) 「職業観の育成」(天草をささえる人材を育てるための職業観育成プログラム)

| | |
|----------|------------------------------|
| 第1年次(基礎) | 情報収集と活用方法を学習・就農教育の実践・職業倫理の醸成 |
| 第2年次(定着) | 現場実習で課題とニーズを分析・産業先端技術の習得 |
| 第3年次(応用) | グローバルな視点での課題解決を实践・GAP認証学習 |

(3) 天草拓心版オーダーメイド学習評価法(AOLA)の構築

| | |
|-----------|--|
| 授業改革推進 | 教職員による「授業デザイン会」及び「授業振り返り会」を実施し、主体的・対話的で深い学びによる授業を推進する。 |
| カリキュラム開発 | カリキュラム開発等専門家との目標共有及び教科横断的な学習計画の開発を実施する。 |
| 評価システムの構築 | AOLAを活用した生徒の課題に対する主体的取組と学習成果の評価を行い、生徒一人一人の変容を捉えていく。 |

5 教育課程の特例の活用の有無

特例の活用 無し

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|-----------|------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 運営指導委員会 | | | | | | 1回 | | | | 1回 | | |
| コンソーシアム会議 | | | | 1回 | | 1回 | | 1回 | | 1回 | | |
| 成果報告会・評価会 | | | | | | 1回 | | | 1回 | 1回 | | |

(2) 実績の説明

ア. コンソーシアムについて

コンソーシアムの構成については、2部からなる支援体制を整えた。一つは、「マザー・サークル(7団体)」(2回/年)として、本校の取組を地域外の視点から客観的に捉え、生徒の学習状況や成果について直接的に指導・助言できる構成とした。もう一つは、「ローカル・サークル(14団体)」(4回/年)として、天草地域内でテーマ毎に協働ができる構成とした。

○マザー・サークル(客観的コンソーシアム)の構成

| 機関名 | 機関の代表者名 | 役割等 |
|------------------------------------|------------|------|
| 一般社団法人未来の大人応援プロジェクト | 代表 岸川 政之 | 学識 |
| (株)デンソー社会ソリューション事業推進部 | 部長 渥美 欣也 | 資源活用 |
| 公立大学法人熊本県立大学環境共生学部 | 准教授 坂本 達昭 | 資源活用 |
| 国立大学法人熊本大学熊本創生推進機構COC+コーディネーター産学連携 | 担当 林田 安生 | 資源活用 |
| 熊本県立農業大学校 | 校長 荒木 亮 | 就農支援 |
| 熊本県天草広域本部 | 本部長 古森 美津代 | 地域創生 |
| 熊本県教育庁教育指導局高校教育課 | 課長 那須 高久 | 運営指導 |

○ローカル・サークル(協働的コンソーシアム)の構成

| 機関名 | 機関の代表者名 | 役割等 |
|-------------------|-------------|-------|
| (株)デンソー天草事業所 | 所長 益田 智 | 研究支援 |
| イオン九州株式会社 イオン天草店 | 販促担当 羽衣石 純夫 | 販売・流通 |
| (株)岡村農園 食品加工・販売部門 | 担当 井上 政哉 | 食品加工 |

| | | |
|-----------------------------|------------|------|
| (株)光延農園 | 社長 光延 啓人 | 栽培技術 |
| J Aあまくさ総務企画部総合企画課企画広報係 | 担当 寺尾 順 | 研究支援 |
| 本渡五和農業協同組合営農経済部営農課 | 課長 吉本 和喜 | 就農支援 |
| 天草畜産農業協同組合 | 課長 井上 美智信 | 学習指導 |
| 熊本農業研究センター天草農業研究所 | 所長 榊 英雄 | 研究支援 |
| 天草広域本部天草地域振興局農業普及・振興課 | 課長 徳永 淳一 | 地域創生 |
| 天草市役所経済部産業政策課 | 課長 植田 伸広 | 地域創生 |
| 天草市起業創業・中小企業支援センター長「Amabiz」 | 所長 内山 隆 | 職業教育 |
| 天草ケーブルネットワーク株式会社メディア事業部 | 部長 芥川 琢哉 | 情報活用 |
| 熊本県立農業大学校 | 農学部長 橋口 英伸 | 学習支援 |
| 熊本県教育庁教育指導局高校教育課 | 指導主事 柿本 剛 | 運営指導 |

イ. カリキュラム開発等専門家について

株式会社チーム天草代表取締役の西嶋隆明氏（非常勤職員として雇用）を週2日程度、指定校に配置した。

ウ. 地域協働学習実施支援員について

天草市役所地域振興部まちづくり支援課参事の河原謙二氏（天草市役所に勤務）を月2回程度、指定校に配置した。

エ. 運営指導委員会について

学校教育及び研究評価、研究関連の有識者6名で構成し、委員会を年間2回開催し、俯瞰的な視点で本事業の進捗、研究成果等に関して指導・助言、評価をいただいた。

○運営指導委員会の構成

| 氏名 | 所属・職名 | 役割分担・専門分野等 |
|-------|---------------------|----------------|
| 木之内 均 | 熊本県教育委員、木之内農園・会長 | 会長/農業、学校教育 |
| 高崎 文子 | 国立大学法人熊本大学・准教授 | 副会長/学識経験者・学習評価 |
| 佐伯 明香 | 阿蘇オーガニックトスカーナ・社長 | 学識経験者・食品加工 |
| 豊田 希 | 有限会社マツイアンドパートナーズ・代表 | 運営指導・地域連携 |
| 山下 弘幸 | 株式会社農テラス・代表取締役 | 運営指導・農業経営 |
| 高司 秀一 | 農業法人高司農園・代表 | 運営指導・農業経営 |

オ. 管理機関における取組について

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

- ・運営指導委員へ事業運営及び研究成果に関する情報を随時発信し、効果的な指導・助言及び評価につなげた。
- ・熊本県スーパー・ハイスクール生徒研究発表会を実施。本県指定校のSSH校、SGH校（経験校含む）、SPH校（経験校含む）、地域との協働事業校（アソシエイト校含む）、SGLH校4校の生徒による合同発表会を企画・実施し、学校同士の意見交換を含め、指定事業への理解促進と研究の充実を図った。
- ・コンソーシアム委員がコーディネーターとなり、SBP（ソーシャル・ビジネス・プロジェクト）学習における愛知県立高浜高校との交流学習、三重県立南伊勢高校との協働による防災非常食開発を開始した。
- ・熊本県高等学校教育研究会農業部会等、各種会議での情報発信と連携促進を図った。

- ・他県指定校との情報交換による事業改善に努めた。
- ・事業運営及び研究実施体制への指導・助言、研究推進を行った。

②事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・コンソーシアム委員及び協力機関と目標を共有し、研究実施体制の維持・継続を図る。
- ・所要経費の予算申請において、学校予算で継続可能な内容を検討し、事業終了後も継続可能な事業実践を行う。
- ・事業終了後の3ヶ年計画（2022年4月～2025年3月）を作成し、コンソーシアムの見直しと成果検証を実施し、本校独自のプログラムとして継続研究を行い、情報発信と成果普及を行う。
- ・卒業後の就農支援及び起業支援を組織的に行い、地域産業イノベーション人財として求められる青年実業家としての資質・能力の育成を継続支援する。
- ・カリキュラム開発検証結果や地域課題解決の成果について、県内地域及び全ての農業系学校と情報共有を行い、地域内外への成果普及や再現性の検証、生徒の効果的な変容について、高度な研究開発を継続する。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

- ・地域資源の活用及び地域が抱える課題解決等に関して、地元天草市及び株式会社デンソーにおいて、「地域資源を活用した教育に関する協定書」を締結している。
- ・天草市と災害発生時における学校施設の避難所等利用に関する基本協定書を締結し、地域における防災型のコミュニティースクールの役割を担っている。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

| 実施項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|-------------------------|------------|----|----|----|----|-------------------|-----|-----|-----|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 科目「総合実習」における天草地域での探究学習 | 1回 | | 2回 | 2回 | | 2回 | 4回 | 3回 | 5回 | 2回 | 1回 | |
| 科目「農業と環境」におけるプロジェクト学習 | 前期活動・中間まとめ | | | | | 後期活動・年間まとめ | | | | 発表 | | |
| 科目「農業情報処理」における情報収集・活用講座 | | | | 1回 | | 1回 | 1回 | 1回 | 1回 | 1回 | | |
| 天拓L a b | | | | | | 天草地域での探究活動と並行して実施 | | | | | | |
| 地域理解研修 | | | 1回 | | | | 1回 | | 1回 | | 1回 | |
| 課題発見講座 | | | | 1回 | | 1回 | 1回 | 1回 | | | | |
| 防災講座 | | | 1回 | | | | | 1回 | | | | |
| GAP研修会 | | | | 1回 | | | | | | 1回 | | |

| | | | | | | | | | | | | |
|-----------|--|--|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|
| HACCP研修会 | | | | | | 1回 | | | | | | |
| 各種講演・講習会 | | | 1回 | | | 1回 | 1回 | 1回 | | | 1回 | |
| 先進地視察研修 | | | | | | | | | 2回 | 1回 | | |
| 研究発表の機会 | | | | | | | 1回 | | | 1回 | | |
| SBP活動 | | | 1回 | 1回 | 1回 | 4回 | 7回 | | 1回 | | | |
| コンソーシアム会議 | | | 1回 | | | 1回 | | 1回 | | 1回 | | |
| 運営指導委員会 | | | | | | 1回 | | | | 1回 | | |

(2) 実績の説明

○研究開発の内容や地域課題研究の内容について

ア 課題研究型学習（天拓プロジェクト）

(ア) プロジェクト学習を主体とした課題研究型学習を実践した。科目「農業と環境」の授業において、野菜の栽培をテーマとした学習を通して、農業に対する科学的な見方・考え方について学習を行った。また、生育調査等を進める過程でデータの収集・調査・分析等を行い、科目「農業情報処理」で学習内容のまとめと学習発表を行った。

食品科学科では、第1次生産による食材について学習し、科目「食品製造」で栽培した野菜の加工実習を实践し、科目「食品化学」で食品加工のメカニズムについて学習した。

(イ) 科目「総合実習」において、地域内外企業やグローバル企業、農業関連機関（JA・県立農業大学校・行政機関など）と連携し、地域資源（農業生産物）を利用した商品開発等に取り組んだ。また、科目「農業と環境」の学習内容の振り返りを行い、その中でPDCAサイクルの手法に則った協働学習に向けて、準備・計画等の立案に取り組んだ。

(ウ) 農業の抱える課題である、畜産の悪臭問題や農地の有効利用、農産廃棄物の有効利用などをテーマとして、地域の農家やグローバル企業、関連企業と連携して課題解決学習に取り組んだ。

(エ) 授業の枠を越えた学習の場を提供するために、「天拓Lab」を試行的に設置した。放課後や休日、長期休業中の時間帯にグループワークによる学習環境の整備を行った。ここでは、SBP活動との合同による学習の場を設定し、生徒間による情報交換ができる環境作りに取り組んだ。

イ 職業観の育成

(ア) 各種講演会において、知的財産の獲得と活用方法について学習した。

(イ) GAP研修やHACCP研修を通して、生産物及び加工品の品質管理や危機管理に対する目的や知識を学習し、職業倫理の醸成に繋げた。

(ウ) 課題研究型学習に付随して、調べ学習による情報収集や地域住民からの聞き取り調査及びアンケートなどにより、情報活用能力の向上に繋げた。

ウ 生徒の資質・能力の育成を効果的に進める評価システムの開発
 (ア) コンソーシアム委員や地域住民、保護者などを対象とした外部評価、校内（生徒、教職員）を対象とした内部評価をアンケート形式で実施した。
 (イ) ポートフォリオを学習成果の記録として使用し、生徒自身の振り返りの機会を増やした。また、評価者は生徒の学習の理解度を把握し、個別の学習支援につなげ、授業改善に生かすことができた。

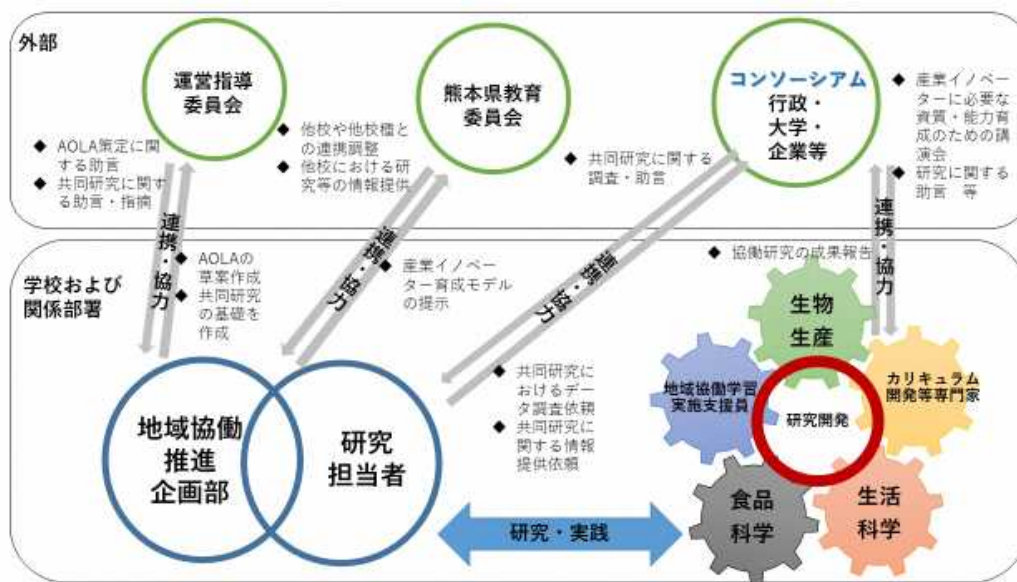
○地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

ア 教科：「農業」
 イ 科目：「農業と環境」、「総合実習」、「農業情報処理」、「食品製造」、「食品化学」

○地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

ア 科目「農業と環境」をベースとした課題研究型学習で、プロジェクト学習の手法について学習した。その手法を用いて、科目「総合実習」にてPDCAサイクルによる地域課題の探求的な学習に取り組んだ。各授業での学習資料を、科目「農業情報処理」で分析・まとめを実施した。
 イ 科目「農業と環境」で失敗体験をした生徒は、科目「総合実習」で振り返りを実施した。原因と結果による因果関係について理解を深め、科目「農業情報処理」で調べ学習を実施した。また、改善点について科目「農業と環境」で実践し課題解決に繋げる資質・能力を向上させた。

○地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制



○学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

| 氏名 | 職名 | 担当教科等 | 役割 |
|-------|-------|--------|-------|
| 酒井 一匡 | 校長 | 教科「商業」 | 統括 |
| 田畑 淳一 | 副校長 | 教科「農業」 | 統括補佐 |
| 大倉 龍喜 | 教頭 | 教科「農業」 | 渉外・指導 |
| 坂本 秀幸 | 主任事務長 | 事務室統括 | 経理 |

| | | | |
|--------|----|------------------|----------|
| 平木 慎二 | 教諭 | 農場長・教科「農業」 | 研究主任 |
| 藤井 隼人 | 教諭 | 生物生産科主任・教科「農業」 | 研究担当主査 |
| 谷口 誠也 | 教諭 | 生物生産科・教科「農業」 | 研究担当副主査 |
| 村田 裕樹 | 教諭 | 食品科学科主任・教科「農業」 | 研究担当 |
| 牛田 寿司 | 教諭 | 生活科学科・教務部・教科「農業」 | 研究担当 |
| 永田 友美 | 教諭 | 教務部・教科「理科」 | 研究担当 |
| 桑島 秀光 | 教諭 | 進路指導部・教科「国語」 | 研究担当 |
| 中本 美佳 | 教諭 | 教務主任・教科「家庭」 | カリキュラム開発 |
| 徳永 守 | 教諭 | 生物生産科・教科「農業」 | 研究担当 |
| 福島 範彦 | 教諭 | 生物生産科・教科「農業」 | 研究担当 |
| 住吉 真輔 | 教諭 | 食品科学科・教科「農業」 | 研究担当 |
| 酒見 博士 | 教諭 | 食品科学科・教科「農業」 | 研究担当 |
| 舟越 弓恵 | 教諭 | 食品科学科・教科「農業」 | 研究担当 |
| 村松 美香 | 教諭 | 生活科学科主任・教科「家庭」 | 研究支援 |
| 杉本 みつこ | 教諭 | 生活科学科・教科「家庭」 | 研究支援 |
| 古閑 真弓 | 教諭 | 生活科学科・教科「家庭」 | 研究支援 |

○カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

| |
|--|
| <p>ア カリキュラム開発等専門家の位置付け 株式会社チーム天草代表取締役 西嶋隆明氏（非常勤職員として雇用）週2日程度高等学校で勤務（勤務実績：年間264時間）</p> <p>イ 地域協働学習実施支援員の位置付け 天草市役所地域振興部まちづくり支援課参事 河原謙二氏（天草市役所に常勤）月2回程度来校して打合せ等を実施した。また、生徒の校外活動に同行して学習支援を実施した。（学期2回程度）</p> |
|--|

○学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

| |
|--|
| <p>ア 研究開発の進捗管理は地域協働推進企画部（校務分掌）で実施した。</p> <p>イ 地域協働推進企画部会議（月2回）で、定期的な確認や成果の検証・評価等を実施し、運営委員会（月1回）、職員会議（月1回）、農業部会（月1回）等を通じて課題収集や方向性の確認・共有等を行い、改善につなげた。また、カリキュラム開発等専門家との協議により、授業全体の進捗状況について管理している。</p> |
|--|

○カリキュラム開発に対するコンソーシアムの取組について

| |
|--|
| <p>ア コンソーシアム会議において、他地域及び他高等学校との実践事例などの検証を行った。</p> <p>イ コンソーシアム会議において、地域のニーズや社会の動向、学校の特色等について検討し、教育目標に沿った授業展開を協議した。</p> <p>ウ 本校のカリキュラム編成による強みと弱みについて検証し、学年間での体系的・系統的な学習の推進及び教科横断的な学習の具体的な指針について指導・助言を行った。特に、普通教科との関わりについて、各専門的な見地からの進言により、生徒個人の課題に対する基礎学力・応用力などの育成方法について協議した。</p> |
|--|

○運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

- ア 運営指導委員会を経て、指摘事項及び指導項目に対する改善を実施した。本校の就農アドバイザーや地元農家、コンソーシアム委員、県内外の先進高等学校等に助言を仰ぎ、改善を行う。
- イ 地域理解や課題発見などの取組について、マーケティング理論に精通した企業及び行政機関の人材より、資料提供及び協働学習の提案などの支援体制による研究活動を実施する。

○類型毎の趣旨に応じた取組について

- ア 農業に関する基礎的・基本的な知識や技能を身に付け、PDCAサイクルによるプロジェクト学習の手法を学習した。
- イ 地域産業の現状について調査・分析を実施し、地域資源について理解を深めた。
- ウ コンソーシアム委員との関わりから、地域の抱える課題や魅力について理解を深めた。
- エ 県内外の人材と連携・協働することで、新たな価値観と職業観を育成した。

○成果の普及方法・実績について

- ア 学校ホームページにて情報公開（月1回程度）
- イ 成果発表及び他校との交流（3回）

8 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 目標の進捗状況

年度当初に計画した研究項目の実施実績については上記の通りである。また、目標設定で設定した当初の目標数値と現在の進捗状況は以下の通りである。

ア 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

| 成果目標項目 | 2019 実績 | 2021 目標値 |
|--|---------|----------|
| 地域に魅力を感じ、愛着を持つ生徒の割合 | 67% | 80% |
| 地域の新たな魅力を再発見した生徒の割合 | 63% | 80% |
| 地域の課題を発見し、解決に向けて意欲的に取り組むことができる生徒の割合 | 67% | 80% |
| 将来、地域のために貢献したいと考え、行動する生徒の割合 | 56% | 80% |
| 他者の話をしっかりと聞き、理解できる生徒の割合 | 39% | 80% |
| 自らの課題意識をプレゼンテーションし、伝えることができる生徒の割合 | 48% | 80% |
| 卒業後、学科の特性を生かした進学・就職の可能率 | 42% | 50% |
| 管内及び県内就職をする生徒の割合 | 46% | 65% |
| 天草拓心高校の研究内容における取組みは本事業で目指す人材育成に効果的：事業に参画する地域住民の評価（4段階） | 3.2 | 3.6 |
| 本事業の研究内容や取組について、評価できる：事業に参画する地域住民の評価（4段階） | 3.2 | 3.6 |
| 本事業の研究内容や取組は、地域の活性化につながる：事業に参画する地域住民の評価（4段階） | 3.3 | 3.6 |

イ 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

| 成果目標項目 | 2019 実績 | 2021 目標値 |
|-----------------------------|---------|----------|
| 外部人材を招いての講話や交流学习(生徒対象)の実施回数 | 20回 | 20回 |

| | | |
|------------------------------|------|-------|
| 研究データやノウハウを提供した学校数(成果報告会を含む) | 24校 | 30校 |
| 成果報告書を配布する(配布数) | 700件 | 2100件 |
| 県内・外への先進地視察研修へ行く生徒の数 | 100% | 100% |
| ホームページ「天草未来日記」の更新回数 | 9回 | 60回 |
| 年3回の授業デザイン会・ふり返り会に参加する教員の割合 | 83% | 100% |

ウ 地域人材を育成する地域としての活動指標 (アウトプット)

| 成果目標項目 | 2019 実績 | 2021 目標値 |
|---|---------|----------|
| コンソーシアムの活動回数：年間6回（マザー・サークル2回、ローカル・サークル4回） | 4回 | 6回 |
| 地域に出て、地域資源を活用しながら地域と協働して活動した回数 | 22回 | 90回 |
| 学校を訪れる地域の方の人数 | 1,656人 | 2,000人 |

(2) 研究の成果

ア これまで外部人材の講話や交流など、年間18回を実施した。アンケートの結果から、地域の新たな魅力について再発見した生徒割合は63%であった。また、地域の課題を発見し、意欲的に取り組むことのできる生徒の割合は67%であった。このような生徒には、ポートフォリオによる振り返りを行った際に、主体的に学習に取り組む傾向が見られ、理解度も高かった。しかし、他者の話を聞き、理解できる生徒の割合は約40%に留まり、記録や振り返りを見ても聞き書きの能力に課題が残った。

イ 生徒が校外に出て、地域資源や地域の知的財産に触れる機会は例年の倍以上である22回であった。成果として、地域課題を具体的に理解し自らプレゼンできる生徒の割合は半数程度であった。また、地域の中で学習を実践したことで、社会の一員であるという自覚が向上し、職業倫理に関する4段階評価結果では0.7ポイント向上し、2.8ポイントとなった。

ウ コンソーシアムと生徒の関わりを作るために、グループ活動によるコンソーシアム委員との情報交換会や学習成果に対するディスカッションを実施した。入学当初には、将来的に地域貢献がしたいと答えた生徒の割合は34%であったのに対し、現在は56%に上昇した。地域の大人と対等にふれあうことで、目的意識をはっきりと持つことができた。

エ コンソーシアムの構築に関して、活動指標として6回の会議を計画していたがローカル・サークル3回（内1回はマザーとの合同会議）、マザー・サークル2回（内1回はローカル・サークルとの合同会議）に留めた。計画した回数に及ばなかったが、コンソーシアム委員からの助言等を受けるタイミングとしては適切な時期に開催できた。コンソーシアム委員からの評価として、本研究が天草地域の課題解決の一端を担う人材育成として有益であると回答した委員は9割を越えた（欠席による無回答含む）。

(3) 研究の評価

ア 成果として生徒の変容・コンソーシアム構築による協働学習の充実化などを得ることができた。しかし、生徒一人ひとりの特性や能力によって個別指導の体制が確立されておらず、生徒間の格差を埋めるには至っていない。今後の研究の方法について検討が必要である。

イ カリキュラム開発に向けて教科間の繋がりを意識した取組みを計画した。教科横断的な学習の観点からは、農業教科での計画的な実施の中で成果を出すことができた。課題として、普通教科との関連付けをポイント絞って行う必要がある。特に生徒の資質・能力を向上させるために最

低限必要な基礎学力の向上、言語活動の充実化をしなければならない現状である。

<添付資料>目標設定シート

9 次年度以降の課題及び改善点

- (1) 1年間の取組の中で、全体的にアウトプットに課題が残った。特に地域や関連機関への情報発信は計画の7割ほどであった。次年度以降、学校ホームページの更新回数増加や取組事例の発表する機会の増加、通信誌などを活用した定期的な情報発信などを充実・強化し、地域住民への認知と外部評価による客観的な教育改革に取り組みたい。今年度取組みの4割増を目指す。
- (2) イノベーション人材を育成する教職員の資質・能力の向上
生徒だけでなく、教職員も外部人材と積極的に接点を持ち、社会の動向や人材育成に関する企業理念等について吸収し、学校現場に波及させる取組を推進する。
- (3) 課題研究型学習の到達点におけるテーマ毎の目的と目標の明確化
今年度は課題解決型学習の内容と方法について研究を進めてきた。コンソーシアム委員や運営指導委員からの指摘事項の中に、到達目標（最終的にどこまでやるのか）と目的（何のためにやるのか）が不明確であると意見をいただいた。次年度は研究テーマ毎に、外部人材やコンソーシアム委員との連携を深めていき、到達目標と目的を明確にした研究活動を推進していく。
- (4) 校内の研究推進体制の見直し（教職員の負担感軽減に向けての取組み）
今年度の課題として、校内での研究計画及び研究活動状況、成果等の周知徹底が十分にできず、一部の教職員に負担が集中する状況であった。次年度は、校内組織及び役割分担等を見直し、持続可能な学校教育の運営を目指していく。
- (5) カリキュラム開発の更なる発展
農業教科と普通教科の横断的な学習を可能にする本校独自のカリキュラムの開発を実施する。生徒の実態及び能力値等に関して教科間の情報交換を実施し、評価の観点等についても統一した視点で作成する。
- (6) 評価システムの開発
本年度はポートフォリオ及びアンケートによる評価を主として取組んできた。次年度は、ルーブリックによる目標に準じた評価の開発を行っていく。

【担当者】

| | | | |
|-----|------------------|--------|--------------------------------|
| 担当課 | 熊本県教育庁教育指導局高校教育課 | TEL | 096-333-2717 |
| 氏名 | 柿本 剛 | FAX | 096-384-1563 |
| 職名 | 指導主事 | e-mail | Kakimoto-t@pref.kumamoto.lg.jp |